

Symposium on the Rehabilitation of the Cancerdisabled

edited by Ronald W. Raven

癌患者のリハビリテーションという言葉が聞かれるようになったのは割合最近の事であるが、不治の病とされていた癌がその種類によっては早期発見、手術、薬物療法、核医学、放射線療法、抗癌剤の発見、及びホルモン療法などの進歩により根治又は生存率が高くなった事で、癌患者の生きるための闘いが医療チームとしてとりあげられるべき問題になったという点で、医学的な面と社会的な面の合流が必要になったわけである。

この本は、1971年5月18日ロンドンで英国外科専門医会の主催で開催されたシンポジウムの記録で、参加者は医師、PT、OT、SW、ナース等多くの専門職である。

内容は癌のリハビリテーションについての理念、実際面での活動、癌による機能障害を持つ患者への働きかけ、痛みのコントロール、患者の栄養改善、社会的なケア、職場復帰、義肢、頭部・頸部の手術のあと

の補装具、乳癌の手術後の問題、人工肛門の問題、病人に対する教会の働きかけ（欧米のシンポジウムらしいが）などが中心になっている。

人生に於て死を待ってベッドに寝たきりになる程悲惨な事はないであろうし、余命に限りがあっても望みを捨てないで心理的経済的に安心して病気と闘い寝たきりの時間を出来るだけ短くしてやるのが理念ととられる本の内容である。確かに大きくわけると癌患者には医学的に病気をコントロール出来るグループと出来ないグループとがある。治療内容のディスカッションでは多分に主観的な所が多く、別に新しいことは述べられていない。機能改善（特に喉頭癌における communication、顔面、四肢を手術したあとのみかけ）という点では、出来るだけ早期に出来る得る最高の補装具を患者に提供する必要性が主張されている。

我国では癌の宣告を患者にはなるべく避ける場合が多いが、欧米では

殆どの場合患者にははっきりと伝えている。国民性の違い、又は宗教的な感覚の差かもしれないが、残された余命を勢いっぱいに生きた患者をこの本を読んで評者は数多く思い出している。

新しい事は別に書かれていないが癌のリハビリテーションもチームアプローチで充実出来るものであり医療チームの責任は患者の最後を見届ける迄その患者の人格を尊重し出来る限りの努力を払うのが、専門職として又人間としての努めであるという、宗教的哲学的感覚の濃い本で余り一般向きではないかもしれないが癌患者に接する可能性がある方には是非一読をお奨めしたい。生きるという事が何かを考えさせられる本である。

(123頁, 2,570円, William Heinemann Medical books, London)

(都養育院附属病院リハビリテーション部長、東京都老人総合研究所リハビリテーション医学部長、高知リハビリテーション学院教授 荻島 秀男)

— 医学書院洋書部扱 —